

## アコと人注…この人にインタビュー《第17回 その2》「<sup>せんだう</sup>千藤尚志さん」

《承前》

——どんなゲームをなさるんですか。

私の定番、どんな所でもやるのは「大きなくりの木の下で」これは誰でも歌えて、それを手ぶり身振りだね、「むすんでひらいて」これも健康にいいじゃないですか。こうやってお互いに知り合う場をつくる。

——ゲームのときは曲は弾かないで、口で歌いながらですか。

そうです。必ずしもアコーディオンを直ぐ弾くわけではないです。

順番として、ゲームが終わった後に歌を始めます。参加者の皆さんも私も最初は緊張していますから気持ちをほぐします。とにかく楽しくをモットーにして。

——そういう場だから間違っちゃって拍手してくれる。

みんな、わははって笑ってくれるんです。だからここには上手下手っていうのは関係ないんですよ。で、よくよく考えてみたら私は演奏家じゃない。要するに黒子というか“楽しませ家”が私の役割なんですわ。

——いま月に何カ所ぐらい行っているんですか。

定例で行っているのは1カ所、あとは福祉施設とか公民館の講座に呼ばれた時とかです。

——月に1回だとしてもそれに向けての練習があるものね。

練習といっても自分で作った歌集を中心にしながらとにかく繰り返し練習します。

《誰も思い出の歌を持っている》

唱歌は皆さん子どものころに誰しもが触れた歌だから懐かしい思い出が蘇ってくるのでしょうか。中には涙を流す人もいます。家では一人で歌うんですかと聞くとやらないと言う返事が多いです。でも心では歌を求めていると思います。

——大変なことだけれども結構楽しんでなさっている、

最初は苦労しました。それを乗り越えちゃったら今は楽しんでます。

——歌集の曲の中にはいろんなジャンルがあると思うけれども、多くは子どものころうたった唱歌が多いんですか。

はい、唱歌が一番多くて、次に懐メロが多くて、それと団塊の世代の唄です。例えば我々の青春時代のうた「若者たち」とかね。今頼まれるところは団塊の世代以降の方々が対象ですから丁度合う。今の若い人達とは、世界が違うっていうことになるかもしれません。

——今日、取材する前に就学前のお子さん連れの音楽会を聴いてきたけれども、若い20代のお母さんたち、あの層っていうのは60、70代の層とうたの世界では意外と合うんじゃないかと思って聴いていたんですね。(どういう点で)子どもたちを膝の上に乗せて聴く音楽としては、1つはクラシック系の音楽はいいと思うんだけど、スマホなんかでガンガン流れている新しい曲よりは、少しゆったりとしたような、「フニクリ・フニクラ」のようにリズム感のあるものもあったけども、また、ヴィバルディの「四季」も、部分的には激しい嵐の場面もあるんだけども、全体としては非常にゆったりとした流れ

があるし、子どもたちをあやしなげに膝に座っている子どもの背中をリズムに合わせてトントンたたいてあげていたりして、若者がバチバチ歌っている歌とは違うなあと思っていた。

そうかも知れないですね。結婚する前の独身で若いときはエネルギーが溜まっていてガンガンやるけども、いったん結婚して子どもができて実際の生活が始まると子どもの教育の悩みが出てきたり、給料が安くてとかね、そういう追いたてられる生活の中で自分の心の安らぎとか癒しとかそういうものを本能的に求めるようになるかもしれませんね。

そうすると今おっしゃった様な曲が若いお母さんたちにぴったり合ってくるのかもしれないですね。生活が変わるんだものね、独身時代とね。

——バッハだとかクラシックの曲っていうのは年代に関係なく人間の心に触れる部分ってあるんだらうけども、日本の唱歌とか民謡なども意外といつまでもいつまでも歌い継がれていく歌だしね。

そうですね、根っこというか源流にあるものはどんな世代に変わろうとも人間にとって良いものは良いついていう共通のものがあるかもしれないですね。

話は飛びますが、昔は歌声に行くのが1つの楽しみであり発散だったけども、今は自分でやれるから、そういう意味では自分で満足している部分があるんですね。

ただ、自分の弱点は、自分が弾きながら歌おうとすると音が狂うときがあるんですよ。歌っているうちに指がどこか間違えちゃう。それがまだまだ弱点だなんて思いますよね。願いはきれいに弾きながら歌を歌えることだなんて思います。

——右手に注意して弾いて左手にも注意

して弾いているそこに歌うとなると、うたの方にも気を遣うことになる。それはもう訓練しなきゃない。

そうなんです、訓練しなきゃない。もしそれができるようになれば、例えば今日は新しい歌を1曲覚えませんか、そういう形に展開できるじゃないですか。みんなに知ってもらいたい新しい歌。メロディーを弾きながらこういう歌だよって歌ってみせられればこんないいことはないと思いますね。

——そういうパターンのときだけ一緒にうたってくれる人って周りにいませんか。

仲間がいることはいるけども、私の場合は全体の時間が1つのストーリーになっているから、もしストーリーの中に新しい歌を組み入れる場合は必ず自信がきるまではやりません。

勿論仲間と組んで取り組むのも新しい取り組みで別の可能性が出てきますね。

《可能性はまだまだあると思っている》

——そういう仲間がいればまた新しい世界が開かれていくんでしょね。

そうですね、だから可能性はいっぱいあると私は思っているんです。1つは仲間とやっていくもの、1人よりも5人10人の方がすごいエネルギーと音の魅力がでる。だからあれはあれで1つの世界があるなんて思っている。市原アコーディオンサークルの活動はそれに該当します。

もう1つは自分なりに目指す世界です。自分流のアイディアと工夫をし



て取り組みます。それが受けた時はやったと

いう満足感があります。地道な努力が必要です。

だからそういうことを考えるとやること  
がいっぱいあって想いが膨らみ楽しいです。  
それに見合う実際の力をつけるのは大変で  
すがこれからも歩みたいです。人生一回切り  
です。夢というより具体的目標を持ってやっ  
ています。

——残された人生で“夢”というよりも、  
こういう形っていう具体的なものですか。

夢は憧れみたいなもの。目標は実現可能な  
ものとして分けています。以前いくつかやめ  
た目標がありました。定年になったら、カル  
チャーセンターを始めようと思ったんです。  
そこで歌声教室、絵画教室、占い教室等いろ  
いろと他の世界もやってみたいということ  
も目的にしたりしましたが、今は棚の上にお  
いた状態です。

実際に今やっている目標はアコーディオ  
ンの他にもあります。畑仕事、地域から頼ま  
れた福祉活動等です。

人生1回きりしかない。限られた自分の人  
生のために出来る限り自分の気持ちを大切  
に生きてゆきたいです。社会の常識や社会の  
目にとらわれない自分の生き方をしたいな  
と日々過ごしています。

こうやって私の話を聞いていただいて今  
ふっと思ったんですけど、乙津さんが実行委  
員会ニュースの記者という形でいろんな人  
との出会いの中で感じたことをニュースの  
中で連載するのもいいかなと思いましたよ。  
苦勞すること、気が付いたこと、学んだこと、  
そういうものが乙津さんの筆筒の引き出し  
にいっぱいあるような気がするんです。

——記録として残っているけれども、そ  
れぞれみなさんの人生があって、聴いてみる  
と一人一人みんな違うからね。育ってきた環  
境も違えば、音楽の世界に触れることが全く

なかった人もいれば、小さいころから恵まれ  
ていた人もいるし、私にもっと表現力があれ  
ば分かりやすく書けるんだろうけれども、な  
かなかむずかしくて、皆さんが語ってくれた  
言葉を使って何か表現するしかないのですね。

私が以前取材した方でも、こんなことはし  
ゃべったこともないし、自分の人生を記録に  
残そうなんて思ったこともなかったけども、  
話をしているいろんなことがよみがえって  
きたとか取材を受けてよかったです、なんて  
言っていたいたときは嬉しかったですね。

——予定の時刻をとっくに過ぎているけ  
れど大丈夫ですか、ある程度時間をつくって  
いただかないとなかなかこういう話はでき  
ないので本当に受けていただく方には感謝  
しています。今日は大事な時間をいただきあ  
りがとうございました。お陰で貴重な話をう  
かがうことができました。

まだまだレポーターを増やしてご活躍  
ください。

こちらこそありがとうございました。

(文責：編集部)

＝おわり＝



取材を終えた千藤氏（右）と筆者

アコと人生で紹介させていただいた方  
は千藤尚志さんで17人となりました。  
うっかり前回のタイトルの表記をそれま  
でと変えてしまいました。今後も続ける  
予定なので、今回元の表記に戻しました。